

小論文

受験番号	氏名
------	----

〔問題〕 以下の文章を読み、設問 1～4 に答えよ。

頭で覚えるというより、①**身体で覚える知識**がある。大工は **A. 巧み**^{かなづち}に金槌でクギを打つが、金槌の打ち方を頭で知っているわけではない。金槌でクギを打とうとすれば、おのずと手が動き、うまく金槌がクギに当たる。頭ではなく「手が知っている」のだ。

もちろん、手が知っているといっても、脳が何の役割も果たしていないというわけではない。脳の働きがなければ、**a. トウゼン**、手は動かないし、金槌も動かない。しかし、手の動かし方にかんして、脳から手に一方的に指令が送られ、手はただその指令に従って動くだけというわけではない。脳と手のあいだには、**B. 双方向的**な信号のやりとりがある。手はみずからその筋肉のあり方に従って動き、その動きが神経信号として脳に伝えられる。脳はその信号にもとづいて手の動きをどう **C. 調整**するかを決め、その調整信号を手を送る。手はそれにもとづいて動きを調整し、その新たな動きをふたたび脳に伝える。このような双方向的なやりとりを繰り返すことによって、金槌でクギを打つときの手の巧みな動きが可能になる。

手はみずからその筋肉のあり方に従って動こうとする。けっして脳の指令どおりにただ動くのではない。これが **D. 肝心**な点だ。金槌でクギの打ち方を覚えるとき、手にはクギを打つのにふさわしいような筋肉がついてくる。そのような筋肉があってはじめて、うまく打てるようになる。もちろん、手と脳のあいだの適切な信号のやりとりも不可欠であり、クギの打ち方を覚えるときに、そのやりとりも習得される。しかし、それだけではなく、クギを打つのにふさわしい筋肉もついてくるのだ。この筋肉のあり方が金槌でクギを打つという知識の不可欠な要素である。手が知っているというのは、手がしかるべき筋肉のあり方をしていっているということだ。「知る」ということは、頭だけで行われるのではなく、身体でも行われるのである。

このクギ打ちの例のように、身体で覚えるには、身体をつくらなければならない。泳げるようになるためには、泳ぐという **b. ドウサ**にふさわしい身体をつくる必要がある。手足にしかるべき筋肉をつけることはもちろんだが、それだけではなく、関節の **c. ジュウナンセイ**や引き締まった **d. タイケイ**も重要だ。泳ぐ練習をするということは、そのような身体をつくるということでもある。もちろん、そうはいっても、身体と脳のあいだの適切な信号のやりとりを習得することも、

やはり不可欠である。いくら身体ができて、信号のやりとりがうまくできなければ、泳ぐことはできない。しかし、逆に、信号のやりとりがうまくできて、泳ぐのにふさわしい身体をつくらなければ、泳ぐことはできないのである。

(出典：信原幸弘『「覚える」と「わかる」 知の仕組みとその可能性』、筑摩書房、21-23、2022年、一部改変)

設問 1. 下線部 A, B, C, D の漢字をひらがなで記せ。

設問 2. 下線部 a, b, c, d のカタカナを漢字で記せ。

設問 3. 下線部①「身体で覚える知識」について、本文で例示をあげている。その箇所を2つ端的に記せ。

設問 4. 本文を読んで「身体で覚える」について、あなたが考えたことを500字以内で述べよ。